

第7回夏期福音特別集会 (伊香保)

狭き門

——マタイ伝7章1～23節——

1960年8月19日

小池辰雄

神さまが追い詰めた場 福音 自己義認 いかにして神の前に義たり得るか 神との交わり
私を取り除いてやるよ 充滿しているところの無 天鐘 内村鑑三の本を求めよ キリストを
求める 十字架のキリスト 我既に世に勝てり 霊力的宗教か、道念的福音か 霊的道念 十
字架におけるバプテスマ セザるを得なくなってくる 四つの非ず 恩寵における砕け 福音
の実存の路 人間らしく生きているか 『霊力的宗教か道念的福音か』(参考)

【マタイ7】

1 なんじら人を審く^{さば}な、審かれざらん為なり。 2 己がさばく審判^{さばかみ}にて己もさ
ばかれ、己がはかる量りにて己も量らるべし。 3 何ゆえ兄弟の目にある塵^{ちり}を
見て、おのが目にある梁木^{うづばり}を認めぬか。 4 視よ、おのが目に梁木のあるに、
いかで兄弟の目より塵をとり除かせよと言い得んや。 5 偽善者よ、まず己が
目より梁木をとり除け、さらば明らかに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき
得ん。

6 聖なる物を犬に与うな。 また真珠を豚の前に投ぐな。 恐らくは足にて踏
みつけ、向き反りて汝^{かえ}らを嘔みやぶらん。

7 求めよ、然らば与えられん。 尋ねよ、さらば見出さん。 門を叩け、さら
ば開かれん。 8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者
は開かるるなり。 9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、 10 魚を
求めんに蛇を与えんや。 11 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物^{たまもの}をその子
らに与うるを知る。 まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わ^{たま}
ざらんや。 12 然らば凡て人に為られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。
これは律法^{おきて}なり、預言者なり。

13 狭き門より入れ、滅びにいたる門は大きく、その路は広く、之より入る
者おとし。 14 生命^{いのち}にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。

15 偽預言者に心せよ、羊の扮装^{よそおい}して来れども、内は奪い掠む^{かす}豺狼^{おおかみ}なり。

16 その果^みによりて彼らを知るべし。 茨^{いばら}より葡萄^{ぶどう}を、薊^{あざみ}より無花果^{いちじく}をとる者あ
らんや。……



21我^{むか}に対して主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。22その日おおくの者、われに^{むか}対して「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐^おいいだし、汝の名によりて多くの能力^{ちから}ある業^{わざ}を為^なししにあらずや」と言わん。23その時われ明白^{あらわ}に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。

●神さまが追い詰めた場

この夏は、私個人としてはいろいろ仕事が忙しくて、実はこの大集会を開く計画はしたもの、せっかく皆さんがあちこちからいろいろなご事情を乗り越えてお集まりになったのですが、それに対して私の方は一向に準備ができてないので、無手勝流というわけです。何もない。そういうような申し訳ない者ですけれども、しかし、神さまの方で、私の準備でない準備と言いますか、備えをしてくださったのです。それは私が今置かれている立場というものが、神さまが追い詰めた場です。それをただ私が告白すればよろしいと、こういうわけです。

とにかく、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書から一箇所ずつ選んで、四つの集会に当てようという、こんな乱暴な選び方も世の中に恐らくなかろうと思う。しかし、それが案外悪くなかったようです。私は軽々しく、「お示し」なんていうことは言わん。

今日はマタイ伝7章を『狭き門』と題してお話します。やはり、『狭き門』と選ばされたのには大いに意味があるだろうと思っております。今日はだいたいぶ新しい方もいらっしゃるよう、私の話は初めての方もいらっしゃるかと思いますので、多少、序言的なことを始めに申し上げて入ろうと思います。また、マタイ伝7章と言いましても、決して今日は、逐語的な解釈をするのでもなければ、まとまった筋道の通ったお話をするのでもない。大体、私はいつもそんなわけですけれども。

語るも聞くも同じことです。私たちはここで聖書の知識や解説を学ぶのではなくて、この集会におきましては、お互いさま一緒になって、また各人が各様な意味におきまして、深くキリストの生命をいただいているというわけです。大丈夫、皆さんはいただけますから。決して

「私はいただけるだろうか、いただけないだろうか。山から下りられるかどうか」

なんて考えないでください。

「ただけない人は残って祈っている」

なんて、そんな無責任なことは私は言いません。どうか、皆さん、大丈夫、いただいて帰れますから、安心してください。

いつも、申すことですが、どうか、聖書というものを、なにか勉強しようと思ったり、



解釈しようと思ったり、認識しようと思ったりして、これをご覧にならないように。聖書の文字の中から我々に今語りかけ、また、私たちに今つかみかかってくるところの、そういう言、そういう現実に自分を投入していく。その時には必ず文句なしに、皆さん一人ひとりそれぞれにふさわしいように、神さまは恵みを与えてくださるので、

「あの人のように私はどうも恵みが入りそうもない」

なんて、そんな心配はひとつもない。皆さん一人ひとりにふさわしいようになっていきますから。どうか、そういう気持ちで、ひとつ樂に入っていたきたいと思います。

●福音

「なんじら人を審く^{さば}な、審かれざらん為なり。²己がさばく審判^{さばき}にて己もさばかれ、己がはかる量りにて己も量らるべし。³何ゆえ兄弟の目にある塵^{ちり}を見て、おのが目にある梁木^{うっぱり}を認めぬか。⁴視よ、おのが目に梁木^{うっぱり}のあるに、いかで兄弟の目より塵をとり除かせよと言い得んや。⁵偽善者よ、まず己が目より梁木^{うっぱり}をとり除け、さらば明らかに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。

イエスという方はこういった譬え^{たと}のような言でもって実に深遠なことを言っておられる。本当は、聖書は解釈しない方が一番いい。皆さんが家で聖書をお読みになるときに、じーつとこれを読む。そして、キリストの言どおりに、その現実の中に自分を置いて、これがいかなる現実を語っているかということを瞑想し祈って、これを受けとったときには――決してキリストは私たちが恐いと思うようなものではなくて――どんなその凄い言でも必ず、私たちを飲^のびのうちに、祝福のうちに入れる。キリストの言は決して審^{さば}きの言ではない。恵みの言です。だから、「福音」、よろこばしき音ずれと言う。外側から見ると、実に恐ろしい言がたくさんあります。けれども、キリストの言は、これを本当に受けとってみると、みんな驚くべき豊かな生命の言であることが分かる。だから福音なんです。

このコツが分かってきたら、もう聖書は本当に楽しくなる。たくさん読まなくていいです。すから、毎日必ずご飯をいただくように、これが本当に自分の魂の本当の生命の糧となるわけです。

「何々先生の集会に行かなければ、何々大集会に行かなければ、恵みに与^{あずか}らない」

というような錯覚を来^きたしている人が世の中にはよくありますが、決してそんなものではない。キリストの恵みというのは、一人びとりが絶対無条件に入るところの素晴らしい世界です。それ以下のものの何か条件がつかなら、私は福音だとは思わない。

●自己義認

とかく、人間は批評がましい。今度の『曠野の愛』誌34号の扉のところに、私が1930



年の元旦に藤井武先生をお訪ねした時のことを書きました。

「先生は、どうもクリスチャンが批評がましくコセコセしていると慨嘆された」

と。先生がああの方に言われた面白い言葉があった。私は正直、その時の先生の気持ちもその言葉尻も今でも髣髴^{ほうふつ}としてくるようです。先生は実に、キリスト教会においても、あるいはまた無教会においても、独りの人であった。先生がおられる時は実に少ない人にしか知られていなかった。今でも相変わらず少ない人ですけれども。

要するに「人を審く」ということはどういうことかと言うと、逆に言うと

「己を義とする」

ということです。自分をよしとして、人をけなす。人を見下す。自己肯定をやっている。自己義認をやっているのが、これが人間の生まれつきの動きです。これを別な言葉で言うところ、エゴイズム、利己主義、自己中心、そして自己弁護^{べんご}ということ。「人を審く」ということが実は「罪」なんです。逆に言うところ、「己を義とする」ということが「罪」なんです。その人は正直、非常に立派かも知れない。けれども、どんなに立派であっても、己を義とすることは罪なんです。そのことの一番いいサンプルは誰であろう、使徒パウロです。パウロはその書翰の中で多分二か所ちゃんとそのことを言っているところがある。彼は

「自分は律法の義については責むべきところがない」

という道徳的チャンピオンです。だから、人の欠点が見えてしょうがない。

また、藤井武先生も立派な方だったから、どうも人の欠点が目についてしょうがなかったようなことを私に言われたこともありました。けれども、先生が書かれた

『あるクリスマスの感話』

という素晴らしい告白でもって、完全にそれを乗り越えられた。

この自己義認というのは実はむしろ、立派な人にひとを審くということが大いにあるわけです。私はさつき註解書をちよつと見たら、そのことが書いてない。「自分の梁木^{うつぱり}」というのは、なにか

「自分の中の大きな悪いことを知らないこと」

のように書いてありますが、そういう場合ももちろんあるでしょう。

「おのが目にある梁木^{うつぱり}を認めぬか」

という。「自分の目の梁木」とは、私たちの目の中に梁木なんか入りつこないんだけど、キリストの言い方はずいぶん針小棒大な言い方をして法螺^{ほら}吹きだな、なんて思うかも知れない。文字通りに読むとキリストもずいぶん法螺吹きですよ。目の中に梁木なんか入りはしない。けれども、そういうような表現で言われるほどに、人間の自己義認というものが根強い、しょうがないものだというわけです。

「自分を義としている」

ことが即ち「おのが目の梁木」です。己^{おの}を義^よとするということは、神さまをいい加減にし



ているということです。人に対して己を義認しているばかりでなくて、神さまに対して己を義認している。

「この驚くべき神さまの前に誰かよく立つことをえんや」

と詩篇130篇にあるとおり、誰も神の前には実は立てない。相対的に人との関係においては、なるほど、己を義としてよいこともあるでしょう。けれども、人間の魂の問題、道徳の問題というのはただ横の関係ではない。それは縦の関係から始まる。イスラエルのモーセの十誡――「十誡」は本当は十言、という――「モーセの十言」というのは、神さまと人間との関係がまず先に立って、それから人間同士の関係というものがある。始めの四つは神との関係、後の五つは対人関係、まんなかの五つめの

「父母を敬え」

というのはちょうど縦のような横のようなものでしょ。

●いかにして神の前に義たり得るか

モーセの十言というのは縦の倫理である。縦の道である。その神さまに対して、果たして自分が義^{ただ}しいかという問題になったら、それはみんな落第です。人間に対して相対的には義しいことがあっても、神さまに対して義しいかということになったら、みな落第です。マルチン・ルターが苦しんだのはそのことです。

「いかにして自分は神の前に義たり得るか」

という問題で彼は苦しくなった。どんなに戒律を守っても、みんなにどんなに模範僧と言われても、それは自分は決して喜ばしく――ちょうど、水が上から下に流れるように――心からやっていない。内心はちよつとも嬉しくない。それがルターの苦しみで、とうとう独房でぶつ倒れてしまつて、もう少しそのままにしておけば、ルターは死んでしまうところだった。彼があまり出てこないから、坊さんが独房の戸を蹴破つて入つてみたら、ルターは真つ青になつて倒れていた。これは彼自身の告白の中に書いてある。それくらい彼は、神の前にいかにして義たらんかという問題に苦しんだ。ここに宗教改革が始まった。そして、彼は自分が神の前に義たり得たかという、成れなかった。降参した。平伏した。神の前に降参した。

●神との交わり

神の前に降参しないで、自分を義とすることは、どんなに立派であつても、人間は手放しではダメです。もし立派であると言うならば、それはどこから来ているか。神さまから来ている。パウロも、まだサウロという時代の、

「律法の義については責むべきところなし」

というその立派さも実は、その結果も本当は神さまから来ている。それを神のものとしな



いところにとんでもない間違いがある。

「神―律法―イスラエルの民（人、我）」という関係で、一生懸命で「律法と我」というものを整えようとして、律法に対して、律法という神の言そのものを客体化してしまっている。そして、一生懸命でそれを外側から守っていたわけです。そういうことでは、パウロはなるほど良さそうだけれども。実は、律法は神の言であって、神の生きた聖なる意志がここに通っている。神さまの聖なる意志の発現としての、神さまの聖なる意志のロゴス化なんです。しかしながら、ロゴス化と言ったって、これはいつも律法の中には神の聖なる意志の血が通っている、神の霊が通っている。だから、私は「律法」と言わないで、それは本当の意味においては聖法であり霊法であるというわけです。聖なる法であり、霊なる法である。聖法、霊法というものを本当に受けとるためには、神に対する信頼がなかったらば、神との交わりがなかったなら、それは全うできない。それを本当に神との交わりにおいて律法を貫いてしまったのが、ナザレのイエス・キリストという唯一人の義人である。だから、彼の

「汝の御意を成させたまえ」

と言って自分を提身しているこの角度に本当の義というものが通ずるわけです。「汝の御意を成させたまえ」というのは、何か「正義」ではない。御意の成らしめられてある事態が義である。その御意そのものが義であるわけです。

そういうような関係から切ってしまったって、自分を義としていることは、どんなにそれ自身が良くても、それはダメです。電灯は、その電源を切ってしまったって、蓄電池でもって光っていても、そのうちにだんだん暗くなってしまう。本当に光っているのは、いつも電気が電源から来ているから。電源から来ていないような、蓄電池みたいなような義が人間の小さな義です。そんな蓄電池の懐中電灯でもって人を照らして、お前のほつぺたに墨が付いているなんて言ってみたって、それはダメです。

●私が取り除いてやるよ

それが即ちキリストの言われたところの、

「己の梁木を――自分の義を大いに立てて、そして人のちよつとしたものを大いに問題にしていから――取り除け」

ということです。キリストはその後は言っておられない。どうやって取り除くかは仰らない。

「己が目から梁木を取り除け」

と、キリストの言は説明的でない。みんな断言的なものだから、だから困る。「取り除けよ」と言うから、

「それでは一生懸命で取り除きましょう」

なんて言ってる。



或る人が

「今度は、先生の集会へ行つて、大死一番したいと思います。云々」

と、私に非常に熱っぽい手紙を寄こしてきた。私はそれを断つた。

「私は大死一番できませんから、あなたがいらつしゃつても、失望なさるから、どうかやめてください。私はあなたのご期待に添うわけに参りませんので。私はダメですから、ご遠方からいらつしゃつても無駄ですから、やめてください」

とお断りした。私は自分で大死一番できない。私はその手紙だけでその人を、ただ文字の上から断つたのではない。全体のその行き方に対して、信仰の質が^{たち}どうしても違いますので、そしてそういった言葉に表れてくるから。

「そういった大死一番式な信仰の方々の群もありますから、そちらの方があなたに良きそうですから」

というようなわけです。

5 偽善者よ、まず己が目より^{うつぱり}梁木^{うつぱり}をとり除け、

キリストが「梁木を取り除け」と言つたつて、梁木を取り除け得る人は一人もない。だから、キリストの言はみんな不可能なんです。その言を額面通りにそのまま自分で手に受けとろうとしたら、それは不可能です。どのキリストの言にあなた方は及第できるでしょうかね。私は絶対にできない。私はもう落第です、完全に落第生です。零点。マイナスかも知れない。取り除けない。

しかしながら、キリストは不可能なことを遠慮なしに仰る。それは、彼がその可能の力を、可能の事態をちゃんと自分が持つてらつしやるから。だから、

「取り除けは、私が取り除いてやるよ。心配はいらん」

と、そういう声の後から響いてこなければ、それを受けとらなかつたらキリストの言は受けとれない。そこなんです。「取り除け」と仰るかたは無責任なかたではない。私たちの人間の先生は無責任です。自分は余り勉強しなくせに、勉強しろなんて言う。そういう先生はダメです。私もしばしばそういう先生だけれども。キリストが「取り除け」と仰るこの言にはちゃんと責任を持つて言つてらつしやる。

「言う者は私である。私に来てごらん。そしたら、私が取り除いてやるよ。心配はいらん」

と。それなんです。キリストの言は恐ろしいけれども、本当は恐ろしくくない。だから、その言の中に入つて行きなさい。キリストの言は神の言と同じように、「取り除け」という律法的なことを言われながら、実はキリストはその「取り除く」ところの實力を与えている。だから、心配はいらんと。



● 充滿しているところの無

そして、取り除けたらば、私たちは自分の義からはずされてしまうわけだ。それからはずされてしまう。即ち、自己義認というのは要するに、我に執すること、我執しているわけです。それが良からうが悪しかろうが、良いものであるうが悪いものであるうが、とにかく自分の持っているものに執着していることはみんな「罪」なんです。我執、我執というやつです。聖書の学者がもし、ギリシア語やヘブライ語ができることを鼻にかけていたら、それは我執ですよ。そんなのはダメです。この我執というやつをすっかり抜かされる。

さらば明らかに覚えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。

そうしたら、どうですか。日本人は一番よくわかる。私がない世界に入っていく。無私の世界に入っていく。私心がない。私がない。私心というやつがなくなってくるから、無色透明である。曇りがなくなってくる。曇りがなくなってくるから、相手の小さなゴミが今度は見えてくる。見えてくるけれども、曇りがいないから、この見えた者が、

「お前はそんなものがある」

と言って審かないんだ。見えたって、審かない。

「塵を取り除き得ん」

と、今度はキリストは仰る。

「それはああ、痛かろう」

と言って、それを取り除いてあげることができる。同じく相手の欠点や何かが見えましても、それを審いて見ることがない。審いて見ることは、自己に執している自己義認というやつです。光がきて、そしてそれでもって相手の者のゴミを取り除き、暖め、痛みや苦しみや悩みを共に感じ、共感してこれを取り除くことができるようになる。ここにキリストのこの譬えの言の素晴らしさがあると思う。

私が言うところの「無私」だとか「無」だとか言うことが、何か冷たいと澄ました聖きよさというような具合に考えられたら、私は非常に困る。そんなことを言っているのではない。無という表現に私は決して執するわけではない。こんな表現なんか執着しているのではない。

だから、無は即、無限の内容をもっている。無は、即、無限です。空無ではない。虚無ではない。充滿しているところの無なんです。真理というものは矛盾の表現でしか言えない。

「ヘー、そういう充滿している無ですか」

なんて。それは自分が充滿しているのではないんだ。他のものが充滿している。

● 天鐘

私は自分の号を「天鐘」と申します。ちょっと偉そうな名前だけでも、これを偉そうに思われたら困る。私はお寺の除夜の鐘を聞くことが好きです。ある時、聞いて瞑想して



いたら、ある真理にぶつかった。即ち、東洋の梵鐘^{ぼんしょう}にはベロがない。中に何も無い。ベロがなければ鳴らないかというのと、これを撞^つけば、ゴーンと鳴る。なぜ鳴るかというのと、その中には天空が宿っている。天が入っている。天に抱かれ、天を宿しているという素晴らしい境地です。だから、撞けば、鳴るものは即ち天なるか鐘なるかというわけで、そこで、「天鐘」という名前にした。即ち、天と鐘とが一如^{すがた}の相である。これは私が自分でとり澄まして天鐘一如になったなんて決して申しません。これは私にとつては恩寵の事態なんです。この天は即ちキリストの聖霊である。聖霊が私の中に充満したもうときに、

「聖霊のキリストと我とは一つ」

という恩寵の事態を悲願として申しているだけの話で、現実には私が天鐘一如の事実でありましたなんて言ったら、それは自己義認だ。そんなことを言っているのではない。私は自分の悲願をただ表現しているだけの話です。

そういうようなのが即ち、無にして充満したところの事態である。だから、自己に執した、そんな判断や何かでものを見ているようなことでなくて、楽に己が抜けたときに本当に天的な認識ができ、またその認識は愛の認識ですから、本当に歓びの世界に相手を変えていくことができる。これが即ち、

「審くなかれ」

から発しているところのキリストの聖言のこころではなからうかと思う

ただ、今私が言ったなかで一つ残っていることがある。

「己^{うづばり}が梁木を取り除く」

とはどのようなことであるかということです。

●内村鑑三の本を求めよ

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、10 魚を求めんに蛇を与えんや。11 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜^{たま}わざらんや。12 然らば凡て人に為^せられんと思うことは、人にも亦その如くせよ。これは律法^{おきて}なり、預言者なり。

全体が詩のような言です。

「求めよ、尋ねよ、門を叩け」

と言う。女の人は百貨店にいろいろなものを求めに行きます。学生はいろいろな社会主義的な思想を求めています。20世紀の今日、日本のいろいろな人々はみんなやはり何か求めている。何か足りなくてしょうがない。けれども、本当に求むべきものを求め、尋ねべきも



のを尋ね、叩くべきものを叩いているかという、みんな見当違いというわけです。

「問題多き日本の現状である。健全なる日本文化の進展はいかなる精神によるべきか。

聖書こそは創造的精神の源泉である。聖書の精神を深く掴んだ内村鑑三の本註解全集は必ずや聖書に対する一般の先入観を吹き飛ばして、これに親しましめ人生と文化に対する創造的意欲を与えてやまぬであろう。」

と、私は内村先生の註解全集に対して紹介の言葉を書いております。もつと詳しいことを『興文』という雑誌の紹介文に書きましたから、読んでみてください。

日本の青年たちに、何はさておきどの本を買えというならば、求めるべき本は、いきなり「聖書」と言っても、それは無理だろうと思うので、内村鑑三の書いたものを薦めたい。たとえば、『二日一生』、これを本当に毎日電車の中でも読んだらいい。これを読んで魂の変わらなような青年だったら、私はもう望みはないと思う。それくらい、内村先生のことを私は第一に薦めたいと思います。この頃、痛切にそのことを感ずる。青年に限らない。内村先生のものは誰が読んでもいい。本当に日本人らしい日本人であり、かつまた本当に世界的な人です。臭みのない人です。内村先生という人は、自分を全身をもつてぶちまけてものを言っている。概念的なことを言つて三段論法でものを言わない。

そういうわけで、今、青年に一番読ませたいのがこれである。私はそう言うのだけでも、東大の学生も、早稲田の学生もどれくらい読んでくれているか知らん。内村先生の「聖書大意」の中の「創世記大意」というところを読んで、聖書を読もうという志を起こさないような青年だったら、私はもう望みなしと言つてもいいくらいに思う。やれ、サルトルだとか、カミュだとか、変てこなものばかり読んでいて、どういうことですかね。とにかく、今は全体が狂つてますよ。思想の方でも、絵画の方でも。脚の先に目玉が付いてみたり。どうもみんな変てこです。

やはり、古典的なものは残つていく。プラトンのものはいくら古くても、哲学では何といつても大きなものです。レンブラントとかダビンチとかいうような画家は何といつても天来の響き、迫力をもったものです。何といつても、本ものはみんな天来の或る絶対境にぶつかつて、そこから発したものです。どういう人がどう判断しても、やはり本ものは遺る。その本ものに、聖書という本ものに取っ付くのに、まことに恰好な内村鑑三という預言者が現れてきた。これをなぜ読まないかと、本当に残念ではないか。今、青年に「求めよ」というのは、

「内村鑑三の本を求めよ」

と私は言つてやりたい。お金がなかったら、断食して食費を節約しても買いなさい。他の本を売つても買いなさい。なにも私は内村先生の本の宣伝をしているのではない。本当にそうだから、そう言っている。



●キリストを求める
もちろん、

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。

と、キリストが言われているものは、その後に出ているところの、
11……まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜^{たま}わざらんや。

とあるように、

「天の父に求めよ」

ということ。キリストの言はいきなり、

「求めよ、尋ねよ、門を叩けよ」

と言う。「誰に求めよ」と書いてない。どこの門を叩くのか。

「何々集会の門でなければダメですか」

なんて。日本中、どこの集会の門を叩いたって、それはダメですよ。私たちはこうやって一緒にキリストの門を、キリストという門を叩いている。キリストは

「父（神）に求めよ」

と、この場合は言ってらっしゃるけれども、どこに本当の父を顕しているものがあるか。それは、

「我を見し者は父を見しなり」

と言われたキリストです。神さまに求め、神さまが一番下さりたいものを求めよと仰るんだけれども、私たちにとっては、父を最もよく示してくださっている、その子であるところのキリストを求める。キリストをいずこに求めるか。聖書に求める。聖書のまた何処に求めるか。福音書に求める。福音書はやはり聖書のアルファにしてオメガです。「始めにして終り」なるところの中心である。始めは創世記であり、終りは黙示録です。けれども、また福音書というものがそういうものです。またある意味において、福音書は心臓部、中心と言っつかまわないでしょう。

「イエス・キリストを求める。イエス・キリストを尋ねる。イエス・キリストの門を叩く」

他のものを求めたら、得そこなうことはある。あるいは、得て失望することもある。

あなた方は、もし小池辰雄なんていうものを求めてきたら、それは必ず失望する。私に何か、そういったような意味において、やって来る人は必ず、いい加減たつと去って行く、躓いていく。私はハッキリ言っている、

「私を求めている人は躓く。私という人にキリストを求めている者はどこまでも一緒に行ける」

と。「我を見し者は父を見しなり」と言うイエス・キリストを求め、これを尋ねる。この門



を叩いたならば、失望することがない。当てはずれがない。他のことではどんなに失望しましても、ここにおいては絶対に失望がない。イエス・キリストに来て、失望したら、その失望する方が間違いだ。その他のものを求めたら、失望された方が間違っている場合もあるでしょう。

●十字架のキリスト

9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、¹⁰ 魚を求めんに蛇を与えんや。

あのパレスチナの石ころとパンは似ている。それから、魚と蛇は似ているものだから。しかし、魚を求めているのに蛇を与えることもしなければ、パンを求めているのに石ころを与えることもしない。

11 然らば、汝ら^あ惡しき者ながら、善き賜物^{たまもの}をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物^{たま}を賜わざらんや。

「惡しき者」というのは「罪びと」ということです。お前たちは善きものを子供たちに与えてやる。まして、天の父は一人びとりに最大のものを、これは他のものとは掛け替えのないというものを与える。言うまでもなく、ルカ伝に書いてあるとおり、これは聖霊のことです。

さあ、困るですね、「聖霊」と言っただけ。私は無教会にいたときに、聖霊のことは余り聞かないし、

「聖霊を求めよう」

なんてことも余り思わなかった。「三位一体」と言うから、聖霊というものもあるらしいくらいに思っていた。実に無教会の信仰というのはそんなものですね。何とはなしに、聖霊のような感じくらいに思っていた。聖霊というのは、いわゆるここに茶碗があるように見えるものではない。

問題をしばっていくと、大事なことは、

「己^{うづばり}が梁木^{うづばり}を取り除け」

「聖霊を求めよ」

というところにしばられて来る。そこで、次第に問題の本論に入っていくわけです。

私たちが神さまの御意を、また善を本当に心からなし得ない、という大きな妨害を、ブレーキをみんな持っている。それが即ち、どうしても抜けない刺^{とげ}であり、「梁木^{うづばり}」という刺です。それは除けられない。外科手術をして取ってもらおうとしても、誰も取れない。人が人の目の中の梁木を取れない。そんなでつかいものも取れない。どんな名医もそれを取れない。

この大障害物を取ってくださったのが、誰だろう、十字架のキリストです。十字架のキリストがこの自己義認を、とかく傲慢になる人間というやつを、人を審いたり押し退けた



りするやつを、本当に人を愛することが出来ないやつを取り除いてくださった。決定的な手術を施してくださいましたが、このキリストの十字架です。

詳しい説明も何もいらん。十字架そのものはいかなる意味があるか、私は説明できない。人間が説明しつくすことができない。また、説明しつくしても、どうにもならん。これがやはり、彼の生涯にぶつかり、聖書にぶつかって、そして、

「ああ十字架とは！」

と各自が感激するより他はない。

『ベンハー』という映画が今来てますね。あそこに十字架の深刻な場が出てくる。私は、ある意味において、目を伏せたくなる。キリストの厳かな十字架の光景ですから。日本人の大方のひとはクリスチャンでないから、あれを平気な顔して見てますけれども。我々がその当時のキリストのことを思ったら、それは簡単に見てはられない。大入り満員で空前の長期間の上映となっている。日本人というのはおかしい民だ。一体何に感激しているか。あの大きな、戦車の競争くらいを見に来るんでしょうか。あの一杯の水を与える光景とか、あの十字架、キリストの光にあつて本当に恵みにあずかっている癩病人……。地方からいらつしやった方はもし時間があつたら、東京で見てお帰りになったらよろしいかと思えます。クリスチャンは見かたが違ふからね。全く確かに傑作です。ああいうところを見て、私たちが魂の奥底から或る呻きを、うなりを覚える。それが十字架です。

●我既に世に勝てり

内村先生の『一日一生』の8月19日のところに、

「キリストいわく、『懼るるなかれ。我既に世に勝てり』と。道義学者ならびにユニテリアンがなんと言おうとも、福音的キリスト信者の安心勇氣の大源泉は、実にキリストに於ける既得の勝利に存するなり。我の為すべきことはキリスト既に我がために為し遂げ給えり。我の義は彼に於て既に天にあり、我は既に彼の死を以て贖われたり、我の得べきものは我既にこれを得たり。いざ残余の生涯を報恩の戦いをして樂しまんと。これ実に真正のキリスト信者が常に泰然として余裕あり、老いてなお^{さか}壯なる^{ゆえん}所以なり。」

こういうのが内村先生の言葉です。即ち、「我既に世に勝てり」と言う。

「我既に汝の中のその『己が梁木』を取り除けり。汝の罪を既に贖い取れり。汝は既に罪無き者、罪から解放された者である」

と。あなた方はどんなに過去に罪があろうとも、どんなに今現在、悩むことがあろうと、なにをか懼れん。既に解放された者です。既に自由なる者です。現在まだ犯すであろうところの、将来まだ蹟くであろうことを、いつまでも心配していて何になるか。キリストはそれらすべてのものに既に勝利してしまった。私たちの魂の一切のいかなる問題も、既に



問題は解決済みである。

「既に私は全部それを背負ってしまったぞ。汝の過去も現在も未来も背負ってあるぞ」

と。だから、私は大死一番しないんです。私は相変わらずダメかも知れませんが、こんなダメな男が、どんな霊的ないわゆる霊力的なクリスチャンが来しても、私はびくともしない。何となれば、私が因り頼むのは、

「我既に世に勝てり。汝を贖いたり」

というこのイエス・キリストであるから。キリストが私の一切であり、私はどんなにガラクタであろうとも、私はどんなに泥の器であろうとも、わがうちにキリストの元始力が、この贖われたる者の中に必ず来るから。贖われたるその解放の歓びをもつてキリストに向かつて行けば、キリストは解放し放しで、そこを空なるところには絶対置きたまわない。

「我が復活の生命を、わが霊を汝に与える」

と。これはパウロが言っている通りです。ローマ書4章25節に、

「主は我らの罪のために^{わた}付され、我らの義とせられん為に甦えらせられ給えなり」

と書いてある。キリストは私たちの罪のために十字架にわたされて、私たちを無罪放免にして、私たちを義とせんがために甦った。キリストの生命は私たちはこの生命を与えて、神との交わりの世界に入れる。「神・キリスト・我」というものが生命の交流の世界に入る。神の御意が立っている縦の関係が、このキリストの生命、聖霊によって貫かれているところが即ち「義」です。

「我らの義とせられんために」

とはそのことです。パウロの言葉がどれほどその当時のいわゆる律法的な内容から発した言葉であろうとも、福音としての義というものは既にそんな固苦しい義ではない。

●霊力的宗教か、道念的福音か

私は相変わらずマイナス99であるかなんか知らん。けれども、このマイナス99というしょうがない奴の中に、絶対にももの凄いとここの聖霊の1が来ている。キリストの十字架の恩寵が既にそのことをしてくださったことに、私は全身をもつて「はいっ」と言つて無条件に受けとる。こちらが悟り、澄ましてみたり、或は滝浴びを試してみたり、火渡りなんかして行くのではない。私はあるがままそのまま、このキリストの十字架を、もうそのまま「はいっ」と言つて――

「^{ななふし}幼子の如く受けよ」

と言うのだから――幼子の如く受ける。そうしたらば、イエス・キリストの聖霊の1がこの中に入つて、この1が驚くべき1で、このマイナス99を必ずやつつけてしまふ。



「信仰より信仰へ行かしめ、恩寵より恩寵へ、力より力へと、ついにキリストの相に化する」
すがた

ということとは、この神の聖霊がなしたもう事実であるから、この確信ならざる確信があなたの方の中に来たらば、そのときには、あなたの方の中に聖霊が必ず来ている、内住しつづけるということの証拠です。

「いかなるものがあつてもキリストのこの恩寵を拒むことができない」

と言える人は、これは聖霊の人です。

私はもはや、人間私というようなことを問題にしない。もはやそんなものには興味がない。人間的不いかなる宗教的なことも、霊力的なこともこの福音とは違うということを、私は今度の藤井先生の記念号の

「霊力的宗教か、道念的福音か」

という文で、たつた二頁だけでも、宣言した。これは或る方面の、或る信仰の在り方に対する、「ナイン！」（否！）という私の声です。

私はそれらの人たちが全部間違っているとは決して申しません。善きものもたくさんあります。決して人を審かない。

「その信仰がどうか」

とは言わない。けれども、その事態の福音の構造からして、私がどうしても承服しがたいことに対しては、私は私の道を行く。同じ群にありながら、そちらの方に、その集会に合流した方々があるから、

「どうか、こちらの集会にはいらつしやらないでください」

と私はハッキリ申します。それで、今度の集会にも幾人かの人はお断りしたのです。このような事態が、人間的に友情としては残念であつても仕方がない。この福音を私は棄てるならば、私はキリストに対して申し訳ないから。キリストに対して申し訳ないことは、私にはできない。この恩寵をいかんせん。

●霊的道念

神さまの賜物は喜んでこれを受ける。しかしながら、賜物を受けるにはちゃんと場がある。角度がある。賜物中の賜物は何か。聖霊である。この聖霊を受けて、そこに本当に神中心、キリスト中心になって、キリストの栄光が現れる。自分が本当に平伏しているならば、どんなに賜物が現れても、それは結構なことです。彼等の群がそうでないとは、私は言うのではない。そういう面もあるでしょう。

しかしながら、私が始終言わなければならないのは、或る一つの色に塗りつぶされたような宗教的な現象事態ではなくして、一人びとりがそれぞれの職業、それぞれの生活の仕方をしてながら、その中に本当に福音が樂に、しかし本当に底力をもつて浸透する、その在



り方を私たちは「福音的」と申したいのです。皆さんのそれぞれの生活において本当に聖霊が内住する。私はそこに「霊的道念」と書きました。この霊的道念が、聖霊における――霊力的ではない――聖霊における道念が発する在り方を福音的と言う。人間は決して自然的存在ではない。自然的なものがどんなに奇蹟的に霊的に素晴らしくなっても、それはただ目には珍しく、人を驚かすにはいいでしょう。

しかしながら、本当に人の心を打つものは、人間の全存在を打つものは、この道念的なものです。人間というものは人格的、道念的存在であることが、私は根源であると思う。これを犯し、これが危うくされるようなことであるなら、どんなにそれが宗教的であつても、それは福音的ではない。その点において、皆さんの自覚を新しくしていただきたいと思う。このことは、マタイ伝の7章のもう少し終りの方にくとハッキリします。これが即ち、キリストが「梁木」と言われたこと。自己の或る宗教的な賜物というものを知らないままに私して、

「俺たちはそれだけの霊的な業ができる」

といったその角度が見える。そして、人を見下している。それは霊的傲慢というやつで、霊的傲慢はサタンの角度になる。これは一番恐ろしい。サタンは

「神と等しからん。お前たちは神の如くならん」

と誘ってくる。キリストはそれに対して

「否^{いな}！」

と言つて戦われたのが、あのサタンとの曠野の戦いである。サタンは

「お前は神の子であるから、頂きから身を投じてみる、天使がお前を救つて死
なないぞ」

と。奇蹟をキリストは決してそのような意味において私なさらなかった。キリストは石をパンになおされない。どこまでも、

「汝の御意を成させたまえ」

と言つて、神さまの義が立つことをキリストはなさつた。キリストの福音は、キリストの業はすべてそうです。福音書に現れているその驚くべき構造が読めないものだから、群衆はキリストの神癒やいろいろな恵みにあずかつて、本当の信仰に入っていないんです。彼らは賜物に引かれて行きます。だから、キリストの前にはたくさん群衆が来て、押し合ひ合ひ合った。けれども、彼らは本当の信仰には入らなかった。本当の信仰に入つたのは使徒たちだけ。本当にペンテコステを受けた人たちだけ。

また、ペンテコステを受けながら、その聖霊が十字架において本当に受けとられていないと、聖霊の事態は或る意味において一時的な善さがあつても、それがまた脱落していく。十字架がしつかりその中に入っていないから。

本当に神さまの前に自分がぶつつぶされ、キリストからこの無罪の事態を受けとつて、



自分がどん底において碎かれたる者、どん底においてそういった傲慢から本当に外された者は、

「一切は神のものなり、キリストのものなり」

という根底的な自覚のある者は本当に聖霊の人です。私は、そうでなければ、聖霊の人と言いたくない。一番、聖霊に反することは霊的傲慢というやつ。霊的傲慢というやつが、どんなに素晴らしい事をやつてのけようと、私は驚かない。私は却つてそれを危険だと思う。それは宗教であるかも知れないが福音ではない。その点で私は戦う。仕方がない。或る方々がその方へ引かれたから、

「そうではありませんよ」

と私はハッキリ言います。あなた方がどんなに仰つても、それはしょうがない。私はやむを得ず、袂^{たもと}を別ちます。あの方々にももちろん人間的に立派な方々がたくさんあるから、私は人間を攻撃しているのではない。人間を攻撃しているのではないが、その事態に対しては、私はどうしても「然り」とは言えない。止むを得ない。しかも、その方々は

「神のご命令によつて、そこへ行きました」

と仰るから、私はまた何をか言わん。ただ私としては、お別れするだけのことです。

しかし、皆さん、私は今、止むにやまれずして、かくのごときことを言わざるを得なくなりましたけれども、どうか、これをうわさごとや何かでものを仰らないでいただきたい。どうか、ここだけの話としてください。私はその人たちの人格を尊重したいから。人格を尊重することと、私がその事に対して「否」と言つたこととは別問題であるということをおわきまえていただきたい。

●十字架におけるバプテスマ

「求めよ、さらば与えられん」

と言っても、私たちは手放しで求めてはいけません。キリストは十字架をもって自分の生涯、福音書全体に対するところの本当の求める場をここに与えていらつしやる。十字架の下、十字架・復活の光の下でなければ、福音書は読むでは間違えます。その意味において、この十字架を通して初めて、私たちは「梁木」が取り除かれてあることに気がつく。既に、梁木は取り除かれてあつた。大死一番するのではない。大死一番されてあるのです。私が大死一番するのではなく、キリストが私の代わりに大死一番してくださったから、その恩寵を無条件に受けとる。私は罪びとだから、その他のことはできない。

とにかく、今までの私は無教会に永いことお世話になつていたけれども、この十字架、即、聖霊降臨ということになつてきましたならば、本当に十字架を受けるとはどういうことであるかということが、いわゆる無教会のそれとは違つてきた。無教会は角度はいいんだけれども。聖霊の受け方が――内村先生はもちろんその中を突破もしてらつしやいました



が――まだ火花している事態であって、それが本当に常恒的に先生の中に燃えていたならば、先生の言葉にはもう一つ別な光と、もう一つ別な響きが出てきたと思う。そこが内村先生について私が或る程度残念に思うことなんです。

けれども、先生は先生の役割を充分お果たしになったので、私たちは、

「お前たちはその先をいよいよ行け」

と言われているわけです。キリスト教の歴史はお互いにそれぞれの役割を果たしていくので、一人が全部なんかとてもできやしません。私なんか果たす役割はごく小さな一部分に過ぎません。

「善きものを賜わさんや」

と言う。なるほど受けとられていることはすべて、梁木が外されることも、聖霊を受けとることも、この十字架に於てです。十字架におけるバプテスマということです。

そういうわけで、12節までが本当に今度は、皆さんの腸の底にこの文字が生命となってくる。力というのは霊力ではない。そのような本当に聖霊に於ける神の正しい福音の、霊的道念とでも表現したいような事態が深く入ってくる。パウロの謂う

「福音は力なり」

とは、そのような角度に於て私は「福音は力なり」と申します。

●せざるを得なくなってくる

¹²然らば凡て人に為られんと思うことは、人にも亦その如くせよ。これは律法^{おきて}なり、預言者なり。

これを「ああ、出来ません」と言つて、クリスチャンは嘆く。

「人に為られんと思うことを人にもせよ」

とは、聖霊のキリストがそのようにして入ってくれば、それはせざるを得なくなってくるわけです。せざるを得なくなってくる。

してもらいたいと思うことは、神さまから私たちにしてくださっている。キリストを通して、してくださっている。現象的ではないですよ、根源的に私たちの中に来ている。最大のものが、最善のものが、無限なるものが来ている。だから、それによつてもう、してもらいたいと思うことがみんなこれは成就しているんだ。神さまは何でも、私たちに本当の意味において、もう現在完了形的に來ている。だから、

「もう、お前さんはキリストで満たされているではないか。それでは、せられんと思うことは、どしどし人に出来るようになるじゃないか」

と。それは事実としては、私たちはそれを文字通りには出来ませんよ。出来ませんけれども、私たちの中から発するものに今度は無理がなくなってくる。無理がなくなつてきて、とにかくそれがどんなに惨めな現れかたでも、本ものが出てくる。偽物でない、外側が立派と



かいうことではないものが出てくる。それが人の心を打つんです。それが本当に人を喜ばす。

●四つの非ず

¹³ 狭き門より入れ、滅びにいたる門は大きく、その路は広く、之より入る

者おとし。¹⁴ 生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。

私は今度初めて、かく狭くされたらば、キリストのこの言が本当に腸にしみてきた。

「観念に非ず、御利益に非ず、パリサイに非ず、靈的傲慢に非ず」

ということ。そこが狭き門、細き路です。「パリサイ」は、さっき言った、人を審く「梁木」のやつです。「靈的傲慢」は、賜物にいい気になって、その賜物をもって人を見下すような、靈力的な信仰者です。「観念」は、聖書を研究してばかりして、頭でもつてつかまえている方々。私は何ものでもない。私はこれらに対して一番優れているなんて絶対に申しません。この四つのものでないということ、この四つのものでありたくないということだけは確かなんです。私は、この四つのものでありたくないという人と一緒にこの福音の戦いをして行きたいと思う。旧約においては預言者たちがそうでありました。彼らはみなほとんど孤独のような人たちです。

この十字架の下において聖霊のバプテスマを受ける場、これが即ち「狭き門」です。この「狭き門」というのが、ただ祈り三昧で、

「聖霊、聖霊」

と言って何かエラク高揚してしまって、幻を見たり、み声を聞いたりとか何とかというのも、それはあるでしょうよ。けれども、十字架が抜けたようなところは、私はとにかく賛成できない。我々にとりましては、この「狭き門」というのは、十字架という門である。しかも、その十字架は本当に――

「聖霊の如く流れる」

とあるが――十字架に聖霊の滝が降り注ぐような、そういうところが私たちにとって「狭き門」です。この門を通れば――いつか「無門の大道」という文を書きましたが――路は細い。今の「四つの非ず」と言うんですから、路は細い。路は細いけれども、行き先は実に広々としたところの果てしなき世界です。

¹⁴ 生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。

この「生命」という字はもちろん「ゾーエ」という「永遠の生命」に関する言葉です。

「之を見出すもの少なし」

とキリストは言われる。懼れるなかれ、悲観するなかれ。「少なし」と言う。何百人とか、何千人とか、何万人とか言うのではない。六十人、七十人。三十人、二十人、十人。藤井先生の所なんか十二、三人。いつもそんなもの。けれども、少ないのが、少ないから良いのではない。少なくて消えてしまったらしょうがない。しかし正直、真理は少数者に隠され



である。

真理は万人のものですよ。決して、特権階級のものではない。福音という素晴らしい真理は誰でもが絶対無条件に得られる、世界中の人が得られるところのものです。そうでありながら、これが本当に少ないというのだから、何と云うことでしょね。そこに人間たちの「梁木」があるわけです。

さっきの「四つの非ざるもの」、霊的傲慢、観念、御利益、パリサイでないもの。神の御意の行ぜられる、現れるところ。栄光の現れるところ。

「自分は神の前に本当に何ものでない」

と言つて、本当に聖名の崇められるところ——口ばかりではない——本当にそういうところ。そこは「狭き門」「細き路」である。しかしながら、そこは、その人たちは本当の意味における永遠の生命です。本当の意味における福音の世界を行くものである。しかもそれは実は、キリストは「少ない」と仰るけれども、キリストは全世界の人にその道を歩いてもらいたい。誰にでも与えたいのですが、事實は少ない。少ないからこそ、キリストはいつまでもその十字架をもつて——パウロが言つたとおり——天界から見ておられるわけです。

「屠^{ほふ}られたるが如^{ごと}き羔羊^{こひつじ}の立てる」

とヨハネ黙示録5章6節にあるようなわけです。

●恩寵における砕け

それは、私たちの側を言うならば、恩寵における砕けです。私たちは「凡人^{ただひと}」である。何ものでもない。私は何になるか、凡人になる。ただし、その凡人においてキリストがその人らしく十全に現れたもうところの凡人でありたい。その人らしくですよ、人真似ではない。皆さん一人びとりは掛け替えのない神品である。神の品である。私はとにかく、人ひとりの人格の自由を絶対に尊重します。全体を何かで統括しようとしてみたりすることは、私は大嫌いだ。

皆さんを本当に神のものとする。人格の尊重というのはそういうものです。そこにおいて神の栄光が現れる品であるからです。この自覚が本当にあるところには、聖霊の安らかさ、本当の底力がある。これは皆さん、だんだん経験なさる。何も恐いものはない。

何か素晴らしそうなものでもって、イエス・キリストのこの恩寵に水を割らんとする、人間的な宗教的なものをもって福音に水を割らんとする者に向かつては——最大の罪は霊的傲慢というやつで、これはサタンの味方だからしょうがない——私はそういう在り方に對して、もし私の認識が間違いでないとしたら、それは否であると言わざるを得ない。

なぜ、神さまは私みたいな弱虫のダメなやつを選びなさったかということが、しみじみ分かる。それは福音は、もし私みたいな者が救われなかったなら、誰も救われない。私が



救われる最後の人である。パウロが

「**我は罪びとの首なり**」^{かしら}

と言ったが、パウロは本当の意味で、そうですよ。そして、罪びとの首となつてくださったのが正にキリストである。私は罪びとの首なんてなれない。罪びとの首となつてキリストが十字架を負った。そのことがパウロの言の後ろに響いてくる。

●福音的実存の路

私たちはこの狭き門を通つたら、実に細き路ながら、天下の大道よりも大丈夫な道である。一人びとりが本当にその足をもつて通る路です。「路」という字は「各々の足」と書く。あなた方が各々の足でもつて歩くところが——キリストは

「**我は道なり**」

という道である——道と路が一如となるとこの世界が本当の実存的な福音的実存の路です。

皆さんに既に今晚もう、深い意味において聖霊が来ているんです。この十字架の前に絶対無条件にそのまま、

「ああ、キリストにこんなにもして、私は贖われていましたか」

ということに気がつくだけのことなんですから。自分で大死一番するとか、何とかするかということではない。

マルチン・ルターが、ローマの階段^{きざはし}を膝で昇つていけば何か供養があるようなことでもつて、階段を昇つて行つたところが、

「**義人は信仰によりて生くべし**」

というハバクク書の言が貫いてきたら、スツと立ち上がつて階段から下りてしまったという。

「キリストを受けとることによつて私は生きる。そこに本当に義がある」

ということに彼は気がついたんです。

私は道念的と言うけれども、何も道徳を語っているのではない。

道念というのは、神・キリスト・我というものが聖霊^{きよき}で貫いている、この御意^{ごい}のきたすところ^{ところ}が即ち霊的道念^{きよき}という。

いわゆる霊力的なものとは違うから、『霊力的宗教か道念的福音か』という、たった2頁の文章だけでも、ここに非常な重さがかかっているんです。

●人間らしく生きていくか

それで、キリストが言われた、

15 偽預言者に心せよ、羊の扮装^{よそおい}して来れども、内は奪^{かす}い掠^{おおかみ}むる豺狼^{おおかみ}なり。



16 その果によりて彼らを知るべし。茨より葡萄を、薊より無花果をとる者あらんや。

その果により知らるべしという。人間らしく生きているか。文化人ならば、本当に文化人として恥ずかしくなく生きているか。いろいろな人が、他の信仰のない方々が見ている。

「さすがに彼らはクリスチャンだ」

と見る、判断の中心はどこにあるか。やはり、人間はみな良心をもって、その人たちの道徳的な在り方を知らず知らずのうちに見ているんです。

「聖霊の果は何であるか」

とパウロがガラテヤ書5章で書いてあるとおりです。霊力的な何かのしわざではない。生活において真にそれが、言葉の最も深い意味において、人間的な現れ方をしているか。本当に信頼するに足る人物であるか。そういうところですよ。

私の友人にH君というドイツ語の同僚がいた。彼は実によく働く。また、学校でもよくいろいろな事を為し、また人のためにも為し、そして自分が本当に正しいと思うことは、遠慮なく言っている、実に男らしい男です。しかし、彼は余りに自分の身体を酷使したために、終に癌でこないだ仆れてしまいました。彼はクリスチャンでも何でもありません。けれども、私はこのような友人の死を本当に尊いと思う。彼は天国に迎えられているに相違ない。

クリスチャンなんていうレッテルで天国へ行けるものではない。だから、キリストはマタイ伝7章の終りの方で何と仰ったか。

21 我に対して主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。22 その日おおくの者、われに対して「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐いいだし、汝の名によりて多くの能力ある業を為ししにあらずや」と言わん。23 その時われ明白に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。

キリストは霊的なものがいかに作用するかをちゃんと知ってらっしゃる。霊には諸々の霊があつて、力がなかなか出てくる。しかも、キリストの名を使つてすらも、それが出来る。恐ろしい世界です。問題は本当に神に栄光を帰し、己を神の前に、キリストの前に空しうしているかということ。

「ケノーシス」(空しさ)という言葉がそれなんです。ピリピ書2章5節に、

「5 汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。6 即ち彼は神の貌にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとせず、7 反つて己を空しうし僕の貌となりて人の如くなれり。8 既に人の状にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順い給えり。」(ピリピ2:5～8)

とある。



「己を空しうして、ついに十字架の死に至るまで従いたまえり」

と。ピリピ書2章5節から8節は、これは期せずして、内村先生と藤井先生の記念号の扉の言葉になってしまった。両方とも。

この「ケノーシス」「空しさ」を、恩寵の世界をいつも魂の世界で本当に受けとっているか。

「^{みこころ}御意を平伏して行うものだけが天国に入る」

とキリストが言われた。

「^{こころ}わが意にあらず、汝の御意を」

ということを貫かれたのがキリストの一生であつた。イエスの地上の一生涯はただこの一言につきた。

マタイ伝7章というところは驚くべきところです。この狭き門、細き路。しかし、ここに本当に天の道あり、天の生命あり。また、これは人を本当に救い上げ、それを祝福していくところの道である。冷たくとり澄ましたものではない。

私たちはなるほど、今私たちが歩ましめられている路は、門は、狭くして細い門であり路であるというが、路はここにいかなる者があつても決して揺るがないところの、右顧左眄することを要しないところの、本当に何処に対してもこれを本当に開示できるところの、いかなるものよりも本当の意味においてキリストの力を持っているところの、聖霊の実存の自由自在に発すべきところの、かくの如きところであるということを皆さんが自覚されるならば、私はこの集会はそのためにあると、皆さんと志を共にせんとして参りました。

●(参考)『靈力的宗教か道念的福音か』

(『曠野の愛』第34号、1960年晩夏 藤井武先生召天記念号より転載)

デカルト(1596～1650)が

「われ思う、故にわれ在り」(Cogito ergo sum)

と言って、近代意識の道をひらいたことは思想史上あまりにも有名である。さりながら「この出発点が、救い難くも抽象の途におちいらしめた。人間意識の最も直接的な事実はこうである。〈私は生きんと欲する生命のただなかにおいて、生きんと欲する生命である〉」

と、シュヴァイツァーが言ったとき、彼はむしろ生命的存在の面から深く実存的に告白したわけである。

しかし、もし自然的生命の直接肯定をなすならば、それは却て動物界の如き本能的闘争の自然界であるに過ぎない。人間の人間たるところはその倫理性にある。倫理のないところに人間もなく、歴史もない。シュヴァイツァーの次の言こそ重要な発言である。



「人間は、その人にとって、植物や動物の生命も、人間の生命と同じく、生命そのものとして神聖であつて、困窮にある生命のために、その人が献身的に救助を与えるときにのみ倫理的である」

と。事実、彼はこのように生きておられる。

現代は原子力時代といわれる。現代の魔物は力である。いかなる瞬間にも全世界を地獄と化し得る原子力の武力、そのようなものを創造しつつある人間の驚くべき科学力である。そのような世界に人間の自由の意欲から発する社会的諸現象には、それぞれ真理性もあるが、人間的我欲という本質的な毒素が、ややもすれば限界や秩序を犯す暴力的諸現象となつてあらわれる。もはや現代の深刻な諸問題は、いかなるイズム（主義、主張）をもつても、これを喰いとめることは出来ない。このような現実を深く洞察した現代ロシアの生んだ実存的、預言者の哲人、ベルジャーエフ（1874～1948）は

「われなやむ、故に我れ在り」

と、その『神と人間の実存的弁証法』の中で告白している。実に人生と世界は苦悩にみちている。そして彼は更に、

「人間らしい人間は、愛のある人であり、苦悩を共にすることのできる人である」

と言っている。闘争また闘争の世相に、最も欠如しているものは、実に愛である。

この現実、混沌たる魔的なものが百鬼夜行的に渦巻いている現実を、根底から救い得るものは、絶対次元に根源をもつ啓示的宗教の力のほかにない。しかるにその宗教が今や大方無力であるといわれる。しかしながら所謂霊力的宗教が人間を真に救うことは出来ない。何となれば、人間は自然的生命としての存在ではなく、人間は道念的生命的存在であるからである。

キリストの福音は単なる霊力的宗教とは質と次元が全くちがう。旧約の預言者的宗教の特質は、その道義的生命にあつた。これを成就したのが言うまでもなくイエス・キリストであつた。それをイエスは「愛」に焦点せしめた。神への愛と人への愛——愛神・愛人——は一如なりと喝破したもうた。これが

「律法（モーセの十誡の根本精神）であり、預言者（預言者の啓示宗教の内実）である」

と言った。イエス自身が、神の愛の化体であり、神言（聖意）の受肉であるからであつた。このキリストに体现した

「愛が律法の完成」

であるとパウロも告白した。

「われ愛す、故にわれ在り」

と現実の私は勿論言いきれるものではないが、キリストに在る信仰の現実において、すべてのキリスト者はかく告白できるはずである。十字架の贖罪愛のキリストを信じ受けとつてゐるたましいは、



「主われを愛す、故に私は人を愛せざるを得ない！」

と告白できるものを内奥にもっている。現実のずれがどのようなであろうとも、この主の贖罪愛の泉をもつ者は、この天的必然の自由なる愛に生きる。このようなキリストの福音は、聖意を心から喜んで受けとらしめ、生ける聖霊の愛をもつて律法(義)を内側から充たさしめる。信仰の現実とは、この角度のものである。

福音的生活は聖意靈法の成就者たるキリストを信受するところに現じゆく道念的生命としての人間の歓喜と自由と、創造と、愛の生活である。文明世界、文化社会の諸々の錯綜せる問題も、結局は、これをいとなむ人間という主体の道念的生命が、毒せられているために生じている現象たるに過ぎない。それゆえ、二十世紀の今日の最大の問題は、道念的生命たる福音による人間の変革である！キリスト教の無力は、その霊的な愛の生命の枯渇にある。しかしながらここに誤解されてならないことは、霊的とは霊力的ということではない。律法(義)、靈法、聖法、聖意、靈生が一貫一如の相において十字架を貫いて受けとられることを霊的という。そこには神、キリストの贖罪愛の生命がしずかに深く、力づくよく動いている。霊力的宗教ではなくして、霊的道念、愛の福音による人間変革こそ根本問題であり、急務である。愛はどん底の荷いである。一切のはでなものとちがう。どんな霊力よりも強いものはキリストの福音の愛の力である。

